大学生の異文化に対する態度について

倉橋洋子*

1.はじめに

昨今、日本人が外国人と接触する機会がますます多くなってきている。平成28年９月27日法務省の発表では、平成28年６月末の在留外国人数は、230万7,388人で前年末より7万5,199人増加し、過去最高の人数になった（法務省a)。内訳は、アジアが全体の75.3%を占め、次にブラジル、米国、ペルーと続く。また、平成27年の外国人の入国者数は、1,968万8,247人であった。同年の日本人の出国者数は、1,621万3,789人であった（法務省b)。これらの数字は、国内外において外国人と接触する、異文化と接する機会が益々増加傾向にあるということを示している。

日本人の異文化の人びとに対する態度や異文化不適応が問題視され始めたのは、1980年代後半からである。[1] 個人レベルでは1989年に日本人の海外留学生が２万人を超え（文部科学省)、組織レベルでは1986年以降、日本企業が生産コストの低い海外へ工場を移転したころである。「海外において日本企業は、本国である日本でのやり方をそのまま踏襲した等により摩擦」が生じた（倉橋2016, p.198)。そのために日本人の海外不適応を論じた様々な書物が出版され、経済協力開発機構（OECD）は多国籍企業行動指針（“The OECD Guidelines for Multinational Enterprises”）を1976年に策定以来、経済発展や企業行動の変化などに合わせて５回改訂してきた。この「行動指針は、一般方針、情報開示、人権、雇用及び労使関係、環境、贈賄・贈賄要求・金品の強要の防止、消費者利益、科学及び技術、競争、納税等の幅広い分野における責任ある企業行動」についてとりまとめている（OECD（経済協力開発機構）閣僚理事会)。

現代では、異文化を学ぶ機会が多くなり、価値観の異なる異文化に対する対処がうまくなっているようである。しかし、多様化する現代において価値観の異なるのは外国人ばかりではない。日本人同士でも価値観が異なり、文化が異なると感じることがある。また、外国人と日本人が互いにストレスを与えることもありうる。グローバル時代において、価値観が多様化する中で、異文化に対する態度の実態を研究する必要がある。

本稿では、従来から文化の差を述べる時に指摘されてきた事柄であり、また日常で問題になる、時間、テリトリー、縦社会、仕事とプライベート、謙遜／自慢、集団主義、意見と人格、ルールを守ること、異文化への関心、異文化との接触、を取り上げ、異文化に対する態度を調べるためにアンケート調査を行った結果の報告と考察をする。なお、同じ事柄に対して相手が外国人と日本人の場合にどのような態度をとるかを比較する。さらに、異文化接触の経験の有無（渡航経験の有無）や男女により取る態度が異なるかどうかも比較する。その上で、異文化理解のための教育方針を提案する。

2.先行研究

本研究に関連する先行研究として、Byram（1997）の「異文化理解力」(intercultural competence）に関する研究を無視することはできない。Byramは、「異文化理解力」として態度、知識、スキル、さらに批判的な文化的気づき／政策的教育を提示している。[2] 本稿に関連する態度とは、「好奇心とオープンな態

* 東海学園大学経営学部教授

度、他文化への不信と自文化への信頼を保留する心構えができていること」である。態度の目標として5つ挙げられており、1つ目は「対等な関係において他と関わる機会を見つけ出して取り上げることを行う意欲」である。2つ目は「自文化、および他の文化や文化的習慣・風習において、よく知っている、あるいはよく知らない現象の解釈に関して他の見解を発見する好奇心」である。3つ目は「自分の環境において、文化的習慣・風習や生産物における価値や予想に疑問を挟むことを行う意欲」である。4つ目は海外に「在住期間中に他の文化への適応やインターラクションに対してこれまでとは異なる段階を経験する気持ちがあること」である、5つ目は「バーバルやノンバーバルのコミュニケーションやインターラクションの慣習に関わる気持ちがあること」である（p. 50）。Byram（1997）の論は、CEFR（ヨーロッパ言語共通参照枠）にも貢献した。さらに、この「異文化理解力」の応用としてByram（2008）は、「外国語教育から異文化市民への教育」において教育論を展開している。

Hall（1959, 1966）は、時間に対する見解をMタイム（Monochronic Time）とPタイム（Polychronic Time）に分けている。Mタイムは一度に1つのことを行い、計画を立てそれに従い、Pタイムは一度に複数のことを行い、時間に厳格でないと論じている。[3]

テリトリーの侵犯に関して、Altman（1975）によれば、Lyman & Scott（1967）は、侵害（violation）、侵略（invasion）、および汚染（contamination）の3つに分けた。侵害とは、保証されていないテリトリーへ入ること、または使用することである。侵略とは、一時的、あるいは永続的に、境界を無視すること、あるいはテリトリーを犯すことである。汚染とは、ホテルの部屋に、前に宿泊した人の洗面用品が残っているなどによりテリトリーが犯されることである。

Trompenaars & Hampden-Turner（1997）は、3万人のデータを集め、普遍主義対個別主義、集団と個人、感情表出文化対感情中立文化、関与特定文化対関与拡散文化、時間の管理等について国別に論じている。また、時間の管理について、MタイムとPタイムの概念とほぼ同じ概念を示し、それぞれ順次的時間志向と同期的時間志向と呼称している。[4] Hofstede（1980, 1991）は、世界40カ国11万人の米IBMの従業員を対象としてアンケート調査を行い、それを公表した。調査項目は、権力格差（power distance）、個人主義（individualism）対集団主義（collectivism）、女性らしさ（femininity）対男性らしさ（masculinity）、および不確実性の回避（uncertainty avoidance）の4つの問題領域である。N・J・アドラー（1991）は、組織と文化や異文化マネジメント等について研究を行っている。

また、日本人論として中根（1967）は、日本社会を分析し、日本社会は単一性に基づいたタテ組織による序列が発達していることを論じている。さらに、松本（2014）は、日米文化の特質を、それぞれの文化特有の価値観、謙遜と対等、集団と個人、依存と自立、形式と自由、調和と主張などについて論じている。日本人の異文化に対する態度は、日本人の行動様式と密接に関連していることから、上記の先行研究のうち、1）時間、2）テリトリー、3）縦社会、4）仕事とプライベート、5）謙遜／自慢、6）集団主義、7）意見と人格、8）ルールを守ること、9）異文化に対する関心に関連する上記の先行研究を参考にする。

3. 研究方法

3.1　研究対象者

中部地区の社会科学系とスポーツ系の大学生（20歳から23歳）75人を調査した。有効回答は72人、有効回収率は約96％であった。内訳は、渡航経験のない男性42人、女性11人、渡航経験のある男性14人、女性5人である。渡航経験は、3日間から3年の期間で、渡航先はアメリカ、イギリス、オーストラリア、カナダ、ドイツ、オランダ、スペイン、グアム、シンガポール、台湾、韓国である。

3.2　方法

無記名の記述式アンケート調査を行った（附録参照）。質問に対する回答は、文章での回答はほとんどなく、単語での回答であったために、それらをクラスター分類し、それぞれの実数と割合（パーセンテージ）で示した。

4.仮説

回答者は、質問事項に関して、外国人が行った場合と日本人が行った場合を比較すると、外国人に対する方がより寛大な態度を取る傾向にあるという仮説を立てた。寛大な態度とは、むやみに人を責めないことであり、異文化理解力につながる態度である。

5.結果と考察

5.1　時間の観念

質問事項１「いつも約束の時間に20分位遅れてくる人がいたらどうしますか」について表１と表２の結果を得た。

表１で示されているように、日本人に対する態度は多い順に、怒る（44.4％）、気にしない（18.1％）、許す（16.7％）、遅れて行く（9.7％）、早い時間を伝える（6.9％）、理由を聞く（4.2％）、心配する（0.0％）であった。男性と女性で異なる反応を示し、男性は渡航経験の有無にかかわらず、怒る、が半数を超えていた。時間に関して、予定通りに行動すること（ホールのＭタイムの傾向）から外れることに対して男性の方が女性よりも怒りを覚えるようである。待たされるということのないように、積極的に遅れて行くという手段を取ることが多くはないがあった（9.7％）。これは、不本意ではあるが相手と同様の行動を取ることになる。また、早い時間を伝えるという回答があったが、これも根本的な解決策にはならない。

表２で示されているように、外国人に対する態度は多い順に、怒る（33.3％）、許す（29.2％）、気にしない（22.2％）、遅れて行く（5.6％）、理由を聞く（4.2％）、心配すると早い時間を伝える（各2.8％）であった。外国人に対する態度のうち、心配する、気にしない、許す、を合わせると半数（合計54.2％）を超え、日本人に対する態度よりも寛大であった。特に、渡航経験のない女性は、心配する、気にしない、許す、を合わせると、半数をはるかに超えた（72.8％）。

表1　時間の観念（日本人に対する態度）

		心配する	許す	気にしない	理由を聞く	怒る	遅れて行く	早い時間を伝える	合計
渡航経験者	男性	0 0.0%	2 14.3%	2 14.3%	1 7.1%	8 57.1%	0 0.0%	1 7.1%	14 100%
	女性	0.0%	1 20.0%	1 20.0%	1 20.0%	1 20.0%	1 20.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	0 0.0%	6 14.3%	6 14.3%	1 2.4%	22 52.4%	4 9.5%	3 7.1%	42 100%
	女性	0 0.0%	3 27.3%	4 36.4%	0 0.0%	1 9.1%	2 18.2%	1 9.1%	11 100%
合計		0 0.0%	12 16.7%	13 18.1%	3 4.2%	32 44.4%	7 9.7%	5 6.9%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

表2　時間の観念（外国人に対する態度）

		心配する	許す	気にしない	理由を聞く	怒る	遅れて行く	早い時間を伝える	合計
渡航経験者	男性	0 0.0%	2 14.3%	7 50.0%	0 0.0%	5 35.7%	0 0.0%	0 0.0%	14 100%
	女性	0 0.0%	2 40.0%	1 20.0%	1 20.0%	0 0.0%	1 20.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	0 0.0%	13 31.0%	6 14.3%	2 4.8%	18 42.9%	2 4.8%	1 2.4%	42 100%
	女性	2 18.2%	4 36.4%	2 18.2%	0 0.0%	1 9.1%	1 9.1%	1 9.1%	11 100%
合計		2 2.8%	21 29.2%	16 22.2%	3 4.2%	24 33.3%	4 5.6%	2 2.8%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

5.2　テリトリーについて

質問事項 2「飛行機（8 時間のフライト）の座席で、自分の席の方まで肘を出している人がいたらどうしますか」について表 3 と表 4 の結果を得た。

表 3 で示されているように、日本人に対する態度は多い順に、本人に抗議する（52.8%）、我慢して何も言わない（30.6%）、肘を出す／押しかえす（6.9%）、気にしないと様子をみる（各4.2%）、客室乗務員に言う（1.4%）であった。特に、渡航経験のない男女において何らかの手段で自分のテリトリーを主張する様子が多くみられた。その一方で、渡航経験のある男性は、自分のテリトリーを主張すると、主張しないが半分に分かれた。

表 4 で示されているように、外国人に対する態度は多い順に、本人に抗議する（63.9%）、我慢して何も言わない（16.7%）、気にしない、様子をみる、客室乗務員に言う（各5.6%）、肘を出す／押し返す（2.8%）であった。渡航経験のある女性を除いて、相手に何らかの手段で自分のテリトリーを主張する態度を取る回答が半数以上あった。

Altman（1975, pp. 111-120）は、人間の行動のテリトリーを以下の 3 つに分類している。3 つの区別の基準は、所有権があると感じているか、あるいは所有権を保証されているかによる。

(1) 第一のテリトリー：日常の中心的な行動範囲であり、所有者の侵入者から守るべき排他的な範囲である。個人の家は第一のテリトリーである。

(2) 第二のテリトリー：第一のテリトリーより排他的でない。近所の行きつけの喫茶店であり、席やテーブルに及ぶこともあるが、それらの使用者は一人とは限らない。

(3) 公的なテリトリー：公に開放されている駐車場のスペースや図書館等をさすが、使用ルールが法律や

表3　テリトリー（日本人に対する態度）

		気にしない	様子をみる	我慢して何も言わない	客室乗務員に言う	肘を出す／押し返す	本人に抗議する	合計
渡航経験者	男性	0 0.0%	1 7.1%	6 42.9%	0 0.0%	1 7.1%	6 42.9%	14 100%
	女性	0 0.0%	0 0.0%	3 60.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 40.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	2 4.8%	2 4.8%	13 31.0%	0 0.0%	2 4.8%	23 54.8%	42 100%
	女性	1 9.1%	0 0.0%	0 0.0%	1 9.1%	2 18.2%	7 63.6%	11 100%
合計		3 4.2%	3 4.2%	22 30.6%	1 1.4%	5 6.9%	38 52.8%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

慣習で定められている。[5]

飛行機の座席は、第一のテリトリーの範疇に入る。また、飛行機の座席で、自分の席の方まで相手が肘を出すことは、Lyman & Scott（1967）によれば侵害に当たる。

日本人は概して自己主張しないと言われてきたが、侵害に対して自己主張する回答（本人に抗議する、客室乗務員に言う、肘を出す／押し返す）は、日本人と外国人に対してそれぞれ61.1％と72.3％あり、外国人に対する方が多かった。

表4　テリトリー（外国人に対する態度）

		気にしない	様子をみる	我慢して何も言わない	客室乗務員に言う	肘を出す／押し返す	本人に抗議する	合計
渡航経験者	男性	0 0.0%	0 0.0%	3 21.4%	1 7.1%	0 0.0%	10 71.4%	14 100%
	女性	0 0.0%	0 0.0%	3 60.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 40.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	3 7.1%	3 7.1%	4 9.5%	2 4.8%	2 4.8%	28 66.7%	42 100%
	女性	1 9.1%	1 9.1%	2 18.2%	1 9.1%	0 0.0%	6 54.5%	11 100%
合計		4 5.6%	4 5.6%	12 16.7%	4 5.6%	2 2.8%	46 63.9%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

5.3　縦社会

質問事項３「アルバイト先で、自分より後に入ってきた年下の人が、いつもため口をきいたらどう思いますか」について表５と表６の結果を得た。

表５で示されているように、日本人に対する態度は多い順に、注意する／教える（33.3％）、怒る（26.4％）、気分を害する（22.2％）、気にしない（13.9％）、許す（2.8％）、理由を聞く（1.4％）であった。ただし、渡航経験のある男性は、怒るが一番多かった（50.0％）。また、渡航未経験の女性は、注意する／教える、気分を害する、怒るが同じであった（27.3％）。

表６で示されているように、外国人に対する態度は多い順に、気にしない（44.4％）、許す（22.2％）、注意する／教える（16.7％）、怒る（15.3％）、気分を害する（1.4％）、理由をきく（0.0％）であった。気にしない、許す、理由を聞く、注意する／教える、を合わせるとはるかに半数を超えていた（83.3％）。

表5　縦社会（日本人に対する態度）

		気にしない	許す	理由を聞く	注意する／教える	気分を害する	怒る	合計
渡航経験者	男性	1 7.1%	0 0.0%	1 7.1%	4 28.6%	1 7.1%	7 50.0%	14 100%
	女性	0 0.0%	1 20.0%	0 0.0%	1 20.0%	3 60.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	7 16.7%	1 2.4%	0 0.0%	16 38.1%	9 21.4%	9 21.4%	42 100%
	女性	2 18.2%	0 0.0%	0 0.0%	3 27.3%	3 27.3%	3 27.3%	11 100%
合計		10 13.9%	2 2.8%	1 1.4%	24 33.3%	16 22.2%	19 26.4%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

年少の新参者がため口をきくことに対して、日本人に対する態度と外国人に対する態度は大きく異なり、日本人に対する方が外国人に対するよりも上下関係を気にする傾向にある。中根千枝（1967）が、日本社会は単一性に基づいた「タテ組織」による序列があると指摘しているように、縦社会に反する行為に対して日本人に対してより寛大になれない傾向にある。外国人に対する序列に関する寛大な態度の理由は、アドラー（1998）の見解に見出される。アドラーは、日本を集団主義の文化とし、「集団主義の文化では、異なる集団が異なる価値観を持つことが受け入れられる」（p. 46）と述べているように、被験者の大学生は外国人という異なる集団に対して、日本の縦社会における上下関係を要求しないことが顕著である。さらに、外国人は敬語が不得意という認識が日本人にはあるために寛大な態度をとる、と考えられる。理由を聞く、注意する／教える、という回答は、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度であり、異文化理解力につながる態度である。

表6　縦社会（外国人に対する態度）

		気にしない	許す	理由を聞く	注意する／教える	気分を害する	怒る	合計
渡航経験者	男性	4 28.6%	5 35.7%	0 0.0%	1 7.1%	0 0.0%	4 28.6%	14 100%
	女性	3 60.0%	2 40.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	20 47.6%	5 11.9%	0 0.0%	10 23.8%	1 2.4%	6 14.3%	42 100%
	女性	5 45.5%	4 36.4%	0 0.0%	1 9.1%	0 0.0%	1 9.1%	11 100%
合計		32 44.4%	16 22.2%	0 0.0%	12 16.7%	1 1.4%	11 15.3%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

5.4　仕事とプライベート

質問事項 4「アルバイト先で店長に急に残業を頼まれた時に、断る人がいたらどう思いますか」について表 7 と表 8 の結果を得た。

表 7 で示されているように、日本人に対する態度は多い順に、許す・仕方がない（37.5%）、気にしない（29.2%）、雰囲気が悪くなる（12.5%）、頼むべき（8.3%）、理由をきく（6.9%）、怒る（5.6%）であった。

表 8 で示されているように、外国人に対する態度は多い順に、許す・仕方がない（47.2%）、気にしない（29.2%）、雰囲気が悪くなる（11.1%）、怒る（6.9%）、頼むべきと理由をきく（各2.8%）であった。日本

表7　仕事とプライベート（日本人に対する態度）

		気にしない	許す・仕方がない	理由をきく	頼むべき	雰囲気が悪くなる	怒る	合計
渡航経験者	男性	2 14.3%	6 42.9%	0 0.0%	1 7.1%	4 28.6%	1 7.1%	14 100%
	女性	3 60.0%	2 40.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	13 31.0%	15 35.7%	3 7.1%	4 9.5%	4 9.5%	3 7.1%	42 100%
	女性	3 27.3%	4 36.4%	2 18.2%	1 9.1%	1 9.1%	0 0.0%	11 100%
合計		21 29.2%	27 37.5%	5 6.9%	6 8.3%	9 12.5%	4 5.6%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

人と外国人に対する態度は、ほとんど変わらず、許す・仕方がない、気にしない、理由をきく、を合わせると半数以上であった。他の人が仕事を優先しなくても気にしなく、あるいは寛大な態度を取ることができるようである。しかし、気にしない（約３割）以外は、仕事優先をよしとする回答である。日本人は、プライベートより仕事を優先すると言われてきた通りである。

表8　仕事とプライベート（外国人に対する態度）

		気にしない	許す・仕方がない	理由をきく	頼むべき	雰囲気が悪くなる	怒る	合計
渡航経験者	男性	3 21.4%	9 64.3%	0 0.0%	0 0.0%	1 7.1%	1 7.1%	14 100%
	女性	3 60.0%	2 40.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	12 28.6%	19 45.2%	2 4.8%	1 2.4%	4 9.5%	4 9.5%	42 100%
	女性	3 27.3%	4 36.4%	0 0.0%	1 9.1%	3 27.3%	0 0.0%	11 100%
合計		21 29.2%	34 47.2%	2 2.8%	2 2.8%	8 11.1%	5 6.9%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

5.5　謙遜／自慢

質問事項５「自分の両親のことを「成功者」であると言う人がいたらどう思いますか」について表9と表10の結果を得た。

表９で示されているように、日本人に対する態度は多い順に、聞き流す（54.2％）、自慢好き（12.5％）、称える（11.1％）、成功の理由を聞く（8.3％）、疑うとなじる（各6.9％）であった。半数以上の回答者が、聞き流すと回答した。聞き流すは真剣に受け止めない態度である。松本（2014）は「日本文化には〈へりくだり〉を美徳とする謙遜志向の文化規則（CTR）がある」（p.8）と指摘しているが、その傾向は顕著である。

表10で示されているように、外国人に対する態度は多い順に、聞き流す（56.9％）、称える（20.8％）、成功の理由を聞く（12.5％）、自慢好き（6.9％）、疑う（2.8％）、なじる（0.0％）であった。聞き流す態度は、日本人と外国人に対してほとんど違わなかった。

表9　謙遜／自慢（日本人に対する態度）

		称える	成功の理由を聞く	聞き流す	自慢好き	疑う	なじる	合計
渡航経験者	男性	2 14.3%	0 0.0%	8 57.1%	3 21.4%	1 7.1%	0 0.0%	14 100%
	女性	1 20.0%	0 0.0%	4 80.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	3 7.1%	4 9.5%	23 54.8%	4 9.5%	3 7.1%	5 11.9%	42 100%
	女性	2 18.2%	2 18.2%	4 36.4%	2 18.2%	1 9.1%	0 0.0%	11 100%
合計		8 11.1%	6 8.3%	39 54.2%	9 12.5%	5 6.9%	5 6.9%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

表10　謙遜／自慢（外国人に対する態度）

		称える	成功の理由を聞く	聞き流す	自慢好き	疑う	なじる	合計
渡航経験者	男性	4 28.6%	1 7.1%	8 57.1%	1 7.1%	0 0.0%	0 0.0%	14 100%
	女性	1 20.0%	0 0.0%	4 80.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	7 16.7%	5 11.9%	25 59.5%	4 9.5%	1 2.4%	0 0.0%	42 100%
	女性	3 27.3%	3 27.3%	4 36.4%	0 0.0%	1 9.1%	0 0.0%	11 100%
合計		15 20.8%	9 12.5%	41 56.9%	5 6.9%	2 2.8%	0 0.0%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

5.6　集団主義

質問事項 6「引っ越してきて 3 年になる人がコミュニティの清掃日に1回も出て来なかったらどう思いますか」について表11と表12の結果を得た。

表11で示されているように、日本人に対する態度は多い順に、(集団行動の）常識がないと思う（30.6%)、声を掛ける／教える（19.4%)、気にしない（16.7%)、仕方がない（11.1%)、怒る（9.7%)、愚痴を言う(8.3%)、理由を聞く（4.2%）であった。これまで多くの研究者（松本, 2014; Adler,1991; Hofstede, 1980）により、日本は集団主義の文化であると指摘されてきた。松本は「地域でも＜町内会＞で集まって近所付き合いをし」と述べているが、みんなで揃って行うことをよしとする集団主義の特徴が顕著に表れている(気にしないと仕方がない、を除くと72.2%になる)。それを証明するかのように、別の日に清掃するという個人主義の価値観に基づく発想がアンケートでも出ていない。

表12で示されているように、外国人に対する態度は多い順に、声を掛ける／教える（27.8%)、仕方がない（23.6%)、気にしないと（集団行動の）常識がないと思う（各16.7%)、怒る（6.9%)、愚痴を言う(5.6%)、理由を聞く（2.8%）であった。気にしないと仕方がない、を除くと59.7%になり、外国人に対しても集団主義の文化の傾向が見られた。声を掛ける／教えるや理由を聞くは、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度であり、異文化理解力につながる態度である。

表11　集団主義（日本人に対する態度）

		気にしない	仕方がない	声を掛ける／教える	理由を聞く	（集団行動の）常識がないと思う	愚痴を言う	怒る	合計
渡航経験者	男性	3 21.4%	1 7.1%	3 21.4%	1 7.1%	2 14.3%	2 14.3%	2 14.3%	14 100%
	女性	1 20.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	4 80.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	7 16.7%	4 9.5%	8 19.0%	2 4.8%	14 33.3%	4 9.5%	3 7.1%	42 100%
	女性	1 9.1%	3 27.3%	3 27.3%	0 0.0%	2 18.2%	0 0.0%	2 18.2%	11 100%
合計		12 16.7%	8 11.1%	14 19.4%	3 4.2%	22 30.6%	6 8.3%	7 9.7%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

表12　集団主義（外国人に対する態度）

		気にしない	仕方がない	声を掛ける／教える	理由を聞く	（集団行動の）常識がないと思う	愚痴を言う	怒る	合計
渡航経験者	男性	4 28.6%	2 14.3%	3 21.4%	1 7.1%	2 14.3%	0 0.0%	2 14.3%	14 100%
	女性	1 20.0%	2 40.0%	1 20.0%	0 0.0%	1 20.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	6 14.3%	9 21.4%	11 26.2%	1 2.4%	9 21.4%	4 9.5%	2 4.8%	42 100%
	女性	1 9.1%	4 36.4%	5 45.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 9.1%	11 100%
合計		12 16.7%	17 23.6%	20 27.8%	2 2.8%	12 16.7%	4 5.6%	5 6.9%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

5.7　意見と人格

質問事項７「会合において自分の提案を率直に否定する人がいたら、その人のことをどう思いますか」について表13と表14の結果を得た。

表13で示されているように、日本人に対する態度は多い順に、意見を聞く（47.2%）、意見を否定する人と思う（19.4%）、反論する／むかつく（15.3%）、気にしない（13.9%）、嫌われていると思う（2.8%）、嬉しいと思う（1.4%）であった。

表14で示されているように、外国人に対する態度は多い順に、意見を聞く（47.2%）、気にしない（25.0%）、反論する／むかつく（13.9%）、意見を否定する人と思う（6.9%）、嬉しいと思う（4.2%）、嫌われていると思う（2.8%）であった。

日本人と外国人の両者に対して、嬉しいと思うと意見を聞く、を合わせると半数近くになった。また、日本人と外国人の両者に対して、渡航経験の有無に関わらず、意見を聞く、が女性に多かった。松本（2014）は、「日本人は議論をしても、多分に感情が入って、あとにしこりを残すことが多い」と指摘しているが、今回の調査においては、日本人と外国人の両者に対して意見と人格を同一視する傾向はあまりないと言える。

表13　意見と人格（日本人に対する態度）

		嬉しいと思う	意見を聞く	気にしない	意見を否定する人と思う	嫌われていると思う	反論する／むかつく	合計
渡航経験者	男性	0 0.0%	5 35.7%	3 21.4%	4 28.6%	0 0.0%	2 14.3%	14 100%
	女性	0 0.0%	3 60.0%	0 0.0%	1 20.0%	0 0.0%	1 20.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	1 2.4%	20 47.6%	7 16.7%	8 19.0%	1 2.4%	5 11.9%	42 100%
	女性	0 0.0%	6 54.5%	0 0.0%	1 9.1%	1 9.1%	3 27.3%	11 100%
合計		1 1.4%	34 47.2%	10 13.9%	14 19.4%	2 2.8%	11 15.3%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

表14　意見と人格（外国人に対する態度）

		嬉しいと思う	意見を聞く	気にしない	意見を否定する人と思う	嫌われていると思う	反論する／むかつく	合計
渡航経験者	男性	2 14.3%	6 42.9%	3 21.4%	0 0.0%	0 0.0%	3 21.4%	14 100%
	女性	0 0.0%	5 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	1 2.4%	16 38.1%	14 33.3%	5 11.9%	1 2.4%	5 11.9%	42 100%
	女性	0 0.0%	7 63.6%	1 9.1%	0 0.0%	1 9.1%	2 18.2%	11 100%
合計		3 4.2%	34 47.2%	18 25.0%	5 6.9%	2 2.8%	10 13.9%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

5.8　ルールを守る

質問事項 8「引っ越してきて 3 年になる人がごみ出しのルールを守らなかったらどう思いますか」について表15と表16の結果を得た。

表15で示されているように、日本人に対する態度は多い順に、注意する／教える（36.1％）、非常識と思う（25.0％）、怒る（19.4％）、気にしない（13.9％）、諦める／許す（4.2％）、蔭口をきく（1.4％）であった。

表16で示されているように、外国人に対する態度は多い順に、注意する／教える（43.1％）、非常識と思う（16.7％）、怒ると気にしない（各13.9％）、諦める／許す（12.5％）、陰口をきく（0.0％）であった。

日本人と外国人の両者に対する態度に違いはあまりみられず、ルールを守らないことに対して守るべきという傾向にある。注意する／教えるは、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度であり、異文化理解力につながる態度である。

表15　ルールを守る（日本人に対する態度）

		気にしない	諦める／許す	注意する／教える	非常識と思う	怒る	陰口をきく	合計
渡航経験者	男性	2 14.3%	3 21.4%	3 21.4%	1 7.1%	4 28.6%	1 7.1%	14 100%
	女性	0 0.0%	0 0.0%	2 40.0%	3 60.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	8 19.0%	0 0.0%	16 38.1%	10 23.8%	8 19.0%	0 0.0%	42 100%
	女性	0 0.0%	0 0.0%	5 45.5%	4 36.4%	2 18.2%	0 0.0%	11 100%
合計		10 13.9%	3 4.2%	26 36.1%	18 25.0%	14 19.4%	1 1.4%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

表16　ルールを守る（外国人に対する態度）

		気にしない	諦める／許す	注意する／教える	非常識と思う	怒る	陰口をきく	合計
渡航経験者	男性	2 14.3%	2 14.3%	4 28.6%	2 14.3%	4 28.6%	0 0.0%	14 100%
	女性	0 0.0%	2 40.0%	2 40.0%	1 20.0%	0 0.0%	0 0.0%	5 100%
渡航未経験者	男性	8 19.0%	4 9.5%	18 42.9%	7 16.7%	5 11.9%	0 0.0%	42 100%
	女性	0 0.0%	1 9.1%	7 63.6%	2 18.2%	1 9.1%	0 0.0%	11 100%
合計		10 13.9%	9 12.5%	31 43.1%	12 16.7%	10 13.9%	0 0.0%	72 100%

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

5.9　異文化への関心

質問事項9「知らない国の人がオリンピックにおいてあなたの関心のあるスポーツでメダルをとったら、その国やその人について興味を持って調べますか／調べませんか」について表17の結果を得た。

表17で示されているように、調べない（54%）と調べる（46%）はあまり差がなかった。この質問では、異文化への関心があるとは言えない。ただし、渡航未経験者の女性は多くの人が（73%）、調べると回答したものの異文化への関心については今後多くの調査が必要である。

表17　異文化への関心

		調べる	調べない	合計
渡航経験者	男性	7 50%	7 50%	14 100
	女性	2 40%	3 60%	5 100
渡航未経験者	男性	16 38%	26 62%	42 100
	女性	8 73%	3 27%	11 100
合計		33 46%	39 54%	72 100

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

5.10　異文化との接触

質問事項10「異文化の人々との接触においてとまどったことがある場合は、その内容とどうしたかを記して下さい」について表18の結果を得た。

渡航経験者も未経験者も、言語に苦労して戸惑っている様子が伺える。また、文化（左手は汚いものを右手できれいなものを扱う民族）や習慣（風呂に入る）の違い、身体接触（ハグ）に戸惑いを覚えている。さらに、アルバイトを定時に帰るは、上記の5.4とも関連しているが、ここではプライベートを優先することに戸惑っている様子が伺える。

グローバル時代において異文化に対する寛大さも問われているが、言語の問題も依然として大きな問題であることが明らかになった。

表17　異文化への関心

		内容	人数
渡航経験者	男性	外国人の中には、風呂に毎日入らない人がいる。	1
		コムニケーションができなかった時に、身振り手振りで知っている単語を並べて話した。	2
		自分が、左手で物を受け取ったら嫌われた。左手は汚いものを右手できれいなものを扱う民族だった。	1
		外国人は、自分の意見を主張する。	2
	女性	自分の英語が通じなかった。	2
渡航未経験者	男性	自分は、分かる言葉とジェスチャーで伝えた。	3
		相手が片言の日本語で聞き取りにくかった。	1
		ベトナム人に日本語も英語も通じなかった。	2
		外国人は、アルバイト中に無駄話が多い。	1
		外国人は、アルバイトで定時に帰る。	1
	女性	言葉の壁があること	4
		外国では、ハグが普通である国がある。	1

上段：実数　　下段：割合（パーセント）

おわりに

今回の調査により、日本人より外国人に対する方がより寛大な態度をとる傾向にあるのは、時間を守ることと序列に関することであり、これらに関しては仮説が立証された。

しかし、テリトリーやルールを守ることに関しては、日本人と外国人の両者に対して寛大でない／厳しい態度を取る傾向にあることがわかった。

その一方で、従来の研究で言われてきた日本文化の傾向に外れる場合に、日本人と外国人の両者に対して、寛大な態度を取ることもあることが分かった。たとえば、仕事よりプライベートを優先しても寛大な態度を取ることができるようである。さらに、日本人は意見と人格を同一視する傾向にあると言われてきたが、今回の調査ではその傾向はあまりみられなかった。日本人の大学生に変化の兆しがみえる。

その反面、これまで日本人は集団主義であると言われてきたように、日本人と外国人の両者に対して、集団主義的傾向の態度を取ることがわかった。さらに、従来指摘されてきた通り、自慢することに対して、聞き流して取り合わない傾向にある。異文化理解力は、無条件に妥協せず、怒らず、コミュニケーションを図ろうとする態度から生じると考えられる。

これらの結果から、異文化理解教育のために以下の事柄を提案する。

1）文化に優劣はないという認識を持つ。
2）異文化に接して戸惑いを覚えたり、不快に感じたならば、自分が自文化に固執していないか考えてみる。
3）明らかに不当に不利益を被るならば、バーバルコミュニケーションやノンバーバルコミュニケーションにより相手に伝える。一方的に我慢する必要はない。
4）何が偏見であるかの知識を持つ。
5）文化の異質性／同質性を楽しむ余裕を持つ。

グローバル時代に異文化の人々と共生するには、互いに理解しようとする気持ちが基本である。その上で上記の事柄を試みることを提案する。

注

本研究のアンケート調査に関して、本学の研究倫理委員会の承認を得た。

本稿の一部は2017年２月25日に異文化経営学会2017年第１回研究大会（於立正大学）にて口頭発表した原稿に加筆修正を加えたものである。

１．日本人の海外不適応については、倉橋（2016, p. 198）参照。

２．Byram（1997）によれば、知識とは「自分と相手の国における社会的グループやその生産物と習慣・風習、および社会的、個人的なインターラクション（相互行為）」（p. 51）の知識である。スキルとして2つ挙げられており、１つは「解釈して、関連付けるスキル」である。すなわち「他の文化の文書や出来事を解釈し、説明し、自国の文書や出来事と関連づける能力」（p. 52）である。もう１つは、「発見し、インターラクションできる能力」（p. 52）である。すなわち、「文化や文化的習慣・風習に関する新しい知識を獲得する能力、リアルタイムのコミュニケーションやインターラクション（相互行為）という制約のもとで知識、態度、スキルを運用する能力」（p. 52）である。さらに、批判的な文化的気づきとは、「批判的に、明白な基準に基づいて、自文化、および他の文化や国の視点、習慣・風習、生産物を評価する能力」（p. 53）である

３．Hall（1976）は、低コンテキスト文化と高コンテキスト文化の概念を導入した。広い情報ネットワークを持つ日本人、アラブ人、地中海沿岸の国の人々は、高コンテキスト文化の人々であるとした。高コンテキスト文化の人びとは、相手が察することを期待して言葉数が少なく、十分に説明しない傾向にある。一方、アメリカ人、ドイツ人、スイス人、スカンジナビア人、他の北ヨーロッパの人々は、低コンテキスト文化の人々である。

４．関与特定文化では、仕事の上司は部下との仕事上の関係を切り離して他の付き合いから分離する。関与拡散文化では、その逆で仕事上の関係を切り離さない。

５．倉橋（2016, p.192-95）参照。

参考文献

Adler, Nancy J. (1991). *International dimensions of organizational behavior*. South- Western Publishing Co.

Altman, I. (1975). *The environment and social behavior*. Montrerey, CA: Brooks/Cole.

Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Clevedon: Multilingual Maters.

Byram, M. (2008). *From foreign language education to education for intercultural citizenship*. Clevedon: Multilingual Maters.

Hall, T Edward (1959). *The Silent language*. New York: Anchor Books / Doubleday.

Hall, T Edward (1976). *Beyond culture*. New York: Random House.

Hall, T Edward (1966). *The hidden dimension*. New York: Anchor Books / Doubleday.

Hofstede, G. (1980). *Cultures consequences: International differences in work-related values*. Beverly Hills CA: Sage Publications.

Hofstede, G. (1991). *Cultures organization: Software of the mind*. MacGraw-Hill.

Lyman, S.M., & Scott, M.B. (1967). Territorial: A neglected sociological dimension. *Social Problems*, 15, 236–249.

Trompenaars, F. & Hampden-Turner, C. (1997). *Riding the waves of culture: Understanding diversity in global business*. New York: MacGraw-Hill.

アドラー , N.J.（1998).『異文化組織のマネジメント』江夏健一他監訳　セントラル・プレス.
倉橋洋子（2016).「日本人の非言語コミュニケーションと行動様式―国際英語論の視点から―」『「国際英語論」で変わる日本の英語教育』くろしお出版.
鳥飼玖美子他編（2011).『異文化コミュニケーション学への招待』みすず書房.
トロンペナールス＆ハムデン-ターナー（2010)『異文化の波―グローバル社会：多様性の理解―』須貝栄訳　白桃書房.
中根千枝（1967).『タテ社会の人間関係：単一社会の理論』講談社現代新書.
法務省a（2016).「平成28年6月末現在における在留外国人数について（確定値)」平成28年11月 3 日
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00060.html
法務省b（2016).「出入国管理統計表」平成28年11月3日
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_nyukan.html
ホフステードG.（2006).『多文化世界―違いを学び共存への道を探る』岩井紀子他訳　有斐閣.
文部科学省（2013).『「日本人の海外留学者数」及び「外国人留学生在籍状況調査」並びに「外国人留学生の10月渡日状況」について』2013年 2 月 3 日
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/01/1315686.htm
松本青也（2014).『日本文化の特質―価値観の変容をめぐって』研究社.

附録

アンケート
以下の質問は異文化に関するものです。研究以外の目的には使用しません。
質問にお答えください。
アンケート結果を開示することに同意する。□　(□に✓を記入)
学年　　(年齢　　)　　性別　男　女
渡航経験　(場所と時期：　　)

異なる文化の人々との接触において
1．いつも約束の時間に20分位遅れてくる人がいたらどうしますか。
　日本人の場合：
　外国人の場合：
2．飛行機（8時間のフライト）の座席で、自分の席の方まで肘を出している人がいたらどうしますか。
　日本人の場合：
　外国人の場合：
3．アルバイト先で、自分より後に入ってきた年下の人が、いつもため口をきいたらどう思いますか。
　日本人の場合：
　外国人の場合：
4．アルバイト先で店長に急に残業を頼まれた時に、断る人がいたらどう思いますか。
　日本人の場合：
　外国人の場合：
5．自分の両親のことを「成功者」であると言う人がいたらどう思いますか。
　日本人の場合：
　外国人の場合：

6．引っ越してきて 3 年になる人がコミュニティの清掃日に 1 回も出て来なかったらどう思いますか。
　日本人の場合：
　外国人の場合：
7．会合において自分の提案を率直に否定する人がいたら、その人のことをどう思いますか。
　日本人の場合：
　外国人の場合：
8．引っ越してきて3年になる人がごみ出しのルールを守らなかったらどう思いますか。
　日本人の場合：
　外国人の場合：
9．知らない国の人がオリンピックにおいてあなたの関心のあるスポーツでメダルをとったら、その国やその人について興味を持って調べますか／調べませんか。
10. 異文化の人々との接触においてとまどったことがある場合は、その内容とどうしたかを記して下さい。